

主に愛されている者よ（２）－初めの愛－

2008. 04. 29 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

エペソ人への手紙 2章8節から10節

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることもないためです。私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。

ヨハネの黙示録 2章1節から7節

「エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。』」

今私たちは皆、すばらしい歌を賛美しました。しかし本当にそう思っているかどうかの問題ではないでしょうか。「私のすべてを主にささげよう。愛する主イエスに何を差し出そう。貧しいこの身を、持てるすべてを」と。大部分の兄弟姉妹がたは、「本当にそう思う」と言うでしょう。しかし、主はどのようにご覧になられているのでしょうか。

昨日、稲毛と茂原で家庭集会がありました。一月前に M 姉妹は天に召されました。しかし、あの家族の雰囲気は今までよりも明るくて、みんな大いに喜んでいたので。奥さんを亡くした R 兄弟ははっきり言いました。「寂しいけれど、悲しくない」。これこそすごい証しでしょう。未信者には絶対に考えられないことではないでしょうか。M 姉妹の二人の

弟夫婦も初めて集会に来られました。二人とも日蓮宗の信者です。(みなさんご存じでしょう。日本人にとって一番大きな問題が位牌・仏壇・墓等々…です。結婚式はどこで挙げてもかまわないが葬儀は仏式でやらないとけしからんという習慣で、大変ですね。)ですから、あの二人の弟さんたちと奥さんたちのためにぜひ祈ってください。隣りに住んでいるのに、集会に出席したのは昨日が初めてらしいのです。しかし主にとって不可能なことはありません。「私たちはキリスト教のために宣伝しません。イエス様を紹介することだけです」と。イエス様は、本当に比類なき素晴らしいお方です。「寂しいけれど、悲しくない」との証しは、やはりイエス様が生きて働いておられる証拠なのではないでしょうか。

今、司会の兄弟がお読みにになりました箇所を見ると、エペソにいる人々とは、このような救いに預かる者たちでした。

エペソ人への手紙 2章8節、9節

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。

カトリック教会はこのみことばを徹底的に否定しています。人間は頑張らなくては、人間はもちろん洗礼を受けなくては、人間は完璧にならなくては、と。そして、献金しなくては云々…、と。

エペソにいる兄弟姉妹は何を経験したかといいますと、「イエス様の救い」とは、私たちの働きがなくても、私たちのいさおしがなくても、ただで私たちに恵みとして主から与えられるものであるということでした。

イエス様の救いは、悔い改めをするすべての人に、贈り物として、プレゼントとして与えられるものです。イエス様は、エペソの兄弟姉妹の罪を拭い去り、彼らの過去を清算してくださただけではなく、御霊によって「新しい人格」を与えてくださいました。つまり、「聖霊」を与えてくださったのでした。彼らは、聖霊の宮になることによって救われたのです。そのような人々は新しい生活を送ることができます。立派になったからではなく、内住の聖霊の力によってです。ですから、

エペソ人への手紙 2章10節前半

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。

と書き記されています。

この間も少し話しましたように、「新しい生活」のいろいろな結果について黙示録2章に書かれています。イエス様は、「わたしは、あなたの行ないを知っています。わたしは、あなたの労苦を知っています。わたしは、あなたの忍耐を知っています。わたしは、あなた

が悪い者たちをがまんすることができなくなったことを知っています」と。

彼らは霊を見分けることができました。彼らは使徒と自称している人々が偽り者であることを見抜いたのです。そのような人々は、人間的に考えれば決して悪い人たちではなかったのです。才能に恵まれ、かつ魅力のある人たちでした。しかし、エペソの兄弟姉妹は主を待ち望む人たちであって、偽使徒たちの影響を受けることなく、彼らを集会の外に追放した、とあります。表面的には彼らは立派な人々でした。しかし彼らの偽りをエペソの兄弟姉妹は見抜いたのです。

主は、そのニコライ派の人たちについて語っておられます。ニコライ派の人たち、すなわち偽預言者のような者とは、自ら信者であると言いながら、「主」のことよりも「自分」のことを大切にされた人々でした。信じると言いながら、肉の生活を続けていたのです。彼らはイエス様にある自由を乱用してしまったのです。間違った教えが広まっていくところにおいては、墮落も生じてくるのです。

ニコライ派の教えの中に、聖職者と平信徒との区別の始まりがあったとされています。聖書のみことばにはそのような区別がありません。いかなる教育も、いわゆる「聖職者」をつくるものではありません。聖書によると、聖霊の宮になったすべての人たちは「祭司」と呼ばれています。生まれ変わりを通してすべての信じる者が祭司である、と聖書ははっきり記しているのです。こんにちのいわゆる「牧師制度」は、聖書には書かれていません。

主は、「わたしもニコライ派の行ないを憎んでいる」とおっしゃっています。主は、ニコライ派の行ないを憎んでおられます。その人たち人間を、憎んでおられるのではありません。主は、「罪人」と「罪」の間を区別してくださるのです。「罪人」は愛されています。しかし、「罪」は徹底的に憎まれています。ニコライズという言葉は、民の支配者という意味です。この言葉によって、この派の教えが一人の人による民全体の支配を意味していることがわかるのです。

この方向の当然の結果として、いわゆる法王制が生まれてきました。ローマの法王は、キリストの代理人、代表者であると言われています。もちろんそのようなことはあり得ません。カトリック教会のボスになる人たちは、決して「生まれ変わったクリスチャン」ではありません。なぜなら、カトリック教会の教えていることと、聖書が語っていることとは根本的に違います。(恥ずかしいことですが、今の法王はドイツの人なのです。) 彼か、彼の跡継ぎかが、間違いなく偽預言者になるのではないかと思います。

カトリック教会は、結局一人のボスがいないとまとめられません。そして、法によってカトリック教会の教えは変わります。それも考えられないことです。確かに表面的に考えれば、プロテスタントの教会よりもカトリック教会は聖書を大切にします。しかし問題が起こると、聖書ではなく、ローマの法王の意見が大切にされます。本当に悲劇的です。大部分のカトリック教会に行っている人たちは、救われていると思込んでしまっているのです。しかし、「福音とは何であるか」、まったくわかっていません。

聖書は、すべての信者がイエス様のからだの肢体である、と記しています。ですから、すべての信者が「主の祭司」であると語っているのです。主は、「わたしはニコライ派の行ないを憎んでいる」と語っておられます。私たちは、このようにイエス様に敵対する者に対しては、はっきりとした態度を取るべきではないでしょうか。

イエス様はエペソの兄弟姉妹を見て喜ばれました。それと同じように、私たちの集会を喜ばれるなら本当に幸いです。

黙示録2章1節から3節において、主はご自分の集会に対する喜びを語られたのですが、4節、5節を見ると、違うことになります。主のご自分の集会に対する不安が語られているのではないのでしょうか。エペソにある主の集会に対してのお喜びは、非常に大きなものでした。しかし悲しむべきことに、このエペソの集会も、主による非難を受けなければならぬことがあったのです。

イエス様は、「あなたには非難すべきことがある」と言われました。主はエペソの兄弟姉妹に対して、180度悔い改めることを呼びかけておられます。主は、エペソの兄弟姉妹がもし悔い改めなければそこにある燭台を取り除く、と警告をお与えになっています。集会がもし光を放つことができなくなれば、もはや何の価値も値打ちもないものになります。つまり、主から捨てられてしまうだけです。歴史は私たちに、エペソの集会が主によってまったく見捨てられてしまったことを教えています。

私たちは、次のことをエペソの集会から学ぶことができます。私たちはすべてのものを自分のものとして持つことができるのです。例えば、エペソの集会が持っていたように、非難することのできない働き、正しい聖書の教え、殉教に対する備えなどを持つことができますが、それらすべてのものを備えていたにもかかわらず、私たちは最も大切なことを見失って、もはや燭台としての働きをなすことができなくなり、さ迷い出してしまうということがあり得る、ということです。すなわち、エペソの兄弟姉妹は「初めの愛」を失ったのです。

「初めの愛」とは何でしょうか。「初めの愛」とは「イエス様との交わり」のことなのです。イエス様なしに何ごとも欲せず、何ごとも為し得ないということです。もし日々みことばが、私たちの喜び、また力の泉、私たちの慰め、私たちの力となり、私たちの知恵となっているのであれば、また私たちの考えと行ないの中心にイエス様がおいでになるならば、それこそ私たちの「初めの愛」が保たれていることの証拠です。これが、燭台がその場に置かれていることの大切な条件です。

しかし、エペソの兄弟姉妹の心は、もはや主との親しい交わりの中にはなかったのです。その結果、主は「もはやわたしはあなたとともにいることができない。わたしはあなたに対して対立する」と言わざるを得なかったのです。

主は、人の行ない、或いは人の歩みをご覧になるのではなく、人の「心」を見てくださ

るのです。箴言 23 章 26 節に、次のように書かれています。短いことばです。

箴言 23 章 26 節

わが子よ。あなたの心をわたしに向けよ。あなたの目は、わたしの道を見守れ。

と記されています。外面的に見ると、エペソの集会はすべてがうまくいっていたのです。しかし主は満足なさらなかったのです。確かにエペソの集会には熱心さがあり、また困難に対する忍耐もありましたが、これらのものもイエス様に対する「初めの愛」に優るものではありません。

エペソ書を読むと、特に「愛」という言葉が何回も何回も出てきます。合わせて 22 回も。主は、まず何よりも私たちの「愛」を、私たちの「心」をご自分のものになさりたいのです。主は、すべてを捨てて抛り頼まない者は「初めの愛」を捨て去った者である、とおっしゃっているのです。

「初めの愛」を、二つの点において考察してみたいと思います。

第一に、時間的な経過という点から。

第二番目に、重要さの変化という点から。

かつてエペソの兄弟姉妹にとって、イエス様に憐れみを与えられ、受け入れられ、解放を与えられ、そして主に仕える者とされたということは、考えられないほどに素晴らしいことでした。しかし、このような恵みに対する驚きは次第に消えたのです。つまり、「初めの愛」を失うということは、決して愛を捨て去るということではなく、愛を「忘れ去る」ことを意味しているのです。

私たちがエペソの教会の兄弟姉妹のように「初めの愛」を忘れないようにするために、毎日曜日、主の聖餐を守ることにしているのです。このことを通して、私たちは常に新たに、「主の苦しみ」と「イエス様の死」と「恵み」を、そして主からいただいた考えられないほどの大きな愛を思い起こそうとしているのです。聖日ごとに私たちは主のこのような恵みに対する感謝の思いを常に新たにし、心から主に礼拝をささげようとしているのです。時々、兄弟たちの祈りを聞くと悲しくなります。「これは礼拝ではない。普通の祈り会ではないか」と。礼拝のとき大切なことは、「人間ではない」のです。「イエス様が何をなしてくださったのか」、このことについて考えるのです。そうすると、私たちは小さくなります。ああしてくれ、こうしてくれ、そういう祈りはささげられなくなります。やはり、イエス様だけを拝すべきなのです。

悪魔が一番嫌っているのは、「まことの礼拝」です。悪魔も人間の礼拝を求めています。悪魔はひどいものです。イエス様への礼拝さえも自分のためにと求めたのです。「一回だけ私の前にひざまずけば、この世界のすべてをあなたにあげます。私に与えられているから」と。サタンが世界の全てをイエス様に与えることが出来たとしたなら、イエス様は死なな

くても良かったでしょう。(それは楽な道ですから。)しかし、イエス様はもちろん断固として拒絶なさったのです。

最も大切なのは、「主を礼拝する」ことです。「主」が中心です。人間がそれを認めようと認めまいと関係ありません。どうして主は礼拝を求めておられるかと言いますと、主を心から礼拝する時にのみ、人間は本当の意味で解放され、満たされるようになるからです。「初めの愛」の表われの一つは、「心から主を崇拝する」ことです。

次に、重要さの変化ということについて考えると、次のように言えます。

かつてはエペソの集会において、主が第一の立場を占めておられましたが、今ではそのようではなくなったのです。それではエペソの兄弟姉妹は何に心を傾けるようになったのでしょうか。たぶん彼らは、それとは知らずに自分の利益を求める者となり、他の人によく思われることを第一に求めるようになったのではないかと考えられます。

主は、イエス様を通して私たちすべての者に愛を注いでおられます。ですから、イエス様もまた、私たちすべての者からの愛を求めておられるのです。私たちの主に対する愛の結果として、「すべてのことを主のためにする」ことを求めておられます。もしそうでないとするならば、残念ですが主は私たちに対立するものとなる、とここに書かれています。ですから、私たちは毎日主に向かってお尋ねするべきではないでしょうか。「イエス様。あなたは私に対して何か対立すべきものを持っておられるのでしょうか」と。

しかし、主の前に静まらなければ、また静かなときを毎日持つことをしなければ、主は私たちに対して何か対立するものを持っておられるか、明らかになさることができないからです。私たちが静かな時を持つことをしないために、主は厳しい手段を用いざるを得ません。例えば、人生の失敗、過酷な運命、或いは重い病気などを与えざるを得ないのです。けれども、これらの手段をお用いにならなければ、主は何か対立すべきものがあっても、それを私たちに伝えることがおできになりません。これが、なぜ主が私たちに苦難の道を歩ませられるかということの理由です。

「初めの愛」は、イエス様を私たちの中心に据えます。そしてこのことは、私たちの過去における一時的な事がらであってはなりません。私たちの全生涯を貫く事がらでなければなりません。多くの結婚が破綻します。それは、誰の場合においても、初めの愛が時と共に冷たくなるからです。その夫が特別な女性をつくることなく、すべてが初めの頃からは変わってしまいます。

これと同じように、愛の破綻が私たちと主との間にも起こり得るのです。初めはイエス様に対するはっきりとした信仰告白があるものです。そして、その後にも信仰の成長に応じた訓練がなされたり、集会における熱心な奉仕がなされたり、聖書に基づいた証しがなされたりするかもしれませんが、これらすべての事がらがイエス様との交わりから生じて

いるということが最も大切なことです。外見的に見るならば、すべてのものは以前と少しも変わるところがないのですが、何か根本的に変わってくるようになりました。

ヨハネの黙示録 2章5節前半

「あなたは、どこから落ちたかを思い出し…なさい。」

と言っておられます。「以前には、主の生き生きとしたご臨在が体験された」という体験は、現在においても体験されなければなりません。私たちが単に悔い改めをしなければならぬということを知るだけでは十分ではありません。

重要なことは、

- ・何から離れて悔い改めをしなければならないのか、知らなければなりません。
 - ・私たちは、何から離れてどこへ向かわなければならないか、知らなければなりません。
- それゆえ、本当の悔い改めとは「常に思い起こす」ということに結びついています。

しかし、もし回心するという正しい道を示されていないのであれば、再び迷いの道に陥る危険性があります。つまり、あなたはどこに向かって転落しているのかということではなく、どこから転落をしたのかということです。

別の言葉で言うならば、あなたが置かれていた「最初の状態を思い出しなさい」ということです。最初の状態の特徴は、イエス様に対するあの「初めの愛」ということです。

エペソの兄弟姉妹は、使徒行伝によると、五百万円に相当する魔術の書物を焼き捨てました。「五百万」、これが「初めの愛」の現われでした。

しかしエペソの集会が変わろうと変わるまいと、それらのこととは関係なく、主は変わりないお方です。

テサロニケ人への手紙・第一 5章24節

あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをして下さいます。

主は真実であられます。黙示録1章5、6節を読むと、二つの表現が出てきます。「私たちを愛し」、また「キリスト・イエスは私たちを愛し」とあります。主は、たとえ信じる者たちの罪があろうと、不真実があろうと、私たちを愛して下さるのです。イエス様ご自身が変わらない、昨日も今日もいつまでも変わらないお方ですから、イエス様の愛も変わりません。私たちが受け入れなくても、拒んでも、主は愛して下さるのです。

エペソの兄弟姉妹は、それ以降どのように変わろうとも、あの初めに体験した恵みを消し去ることはできません。たとえ自分が忘れ、イエス様だけを見上げる信仰が消え失せたとしても、初めの体験は消し去ることができません。

ヨハネの黙示録 2章5節前半

「悔い改めて、初めの行ないをしなさい。」

悔い改めがなされて後、悔い改めの「実」が結ばれるのです。多くの人が反省します。後悔します。悪かったと言います。しかし、それだけでは十分ではありません。「実」がなければ。ですから、

マタイの福音書 3章8節

「悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」

と記されています。これらの実は、新たにせられた主との交わりから生み出されてきたものです。「初めの行ない」は、「初めの愛」から生まれたものです。主は、「あなたがすべてのことを『わたしに対する愛』からなしていたあの時の思いを思い起こしなさい」とおっしゃっておられます。

主は、外側だけをご覧になられるお方ではありません。主は人の動機を見ておられます。サムエル上16章7節は、サムエルがダビデの家へ行った時のことばです。

サムエル記・第一 16章7節

主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

と書かれています。すべての行ないの背後に必ず動機があるものです。そして、その動機が大切なのです。しかしエペソにおいては、この「初めの愛」とイエス様だけを仰ぎ見る信仰が失われてしまいました。イエス様の行ないの動機は、「愛」です。

エペソ人への手紙 5章25節前半

キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた。

と記されています。イエス様は、私たちの行ないにおいても、その動機が愛であることを求めておられます。

「信仰」とは、人と人、また心と心との間で取り交わされる「献身」ということです。ですから、イエス様に対する熱烈な求めが失われている状態では、人は「初めの愛」から遠く離れてしまっているのです。イエス様との交わりは、養わなければなりません。これは、みことばと祈りとによって養われるものです。

初めの愛の実例は、これをマリヤに見ることができるのではないかと思います。

マリヤは、すべてにまさってイエス様を愛した姉妹でした。彼女は、イエス様の足元に座り、イエス様のみことばに耳を傾けておりました。(ルカ伝10章38節から42節)それだけではなく、彼女は値の高い香油をイエス様にささげたのです。(ヨハネ伝12章3節)彼女は、彼女を批判する者のことは考えず、イエス様のみこころにかなうことだけを求めたのです。「イエス様がお喜びになられるなら嬉しい」と。

パウロは、コロサイにいる人々に書きました。

コロサイ人への手紙 3章23節

何をするにも、人に対してではなく、主に對してするように、心からしなさい。

主に對してするのでなければ、何をしても疲れます。初代教会は、なぜそのように用いられたかと言いますと、彼らは次の思いを持っていたのです。

コリント人への手紙・第二 5章9節後半

私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

人間は何を考えようとも関係ない。主に喜ばれたい、と。

「初めの愛」とは何でしょうか。

- ・「二心のないイエス様への愛」
- ・「真の謙遜」
- ・「ただちに従う」こと
- ・「イエス様の再臨を、心から待ち望む」こと
- ・「みことばに対して無条件に服従する」こと
- ・「兄弟姉妹に対して真心からの愛を持つ」こと

です。

私たちは初めの愛を失ってしまった者ではないでしょうか。もしそうであれば、私たちはいのちの源へ立ち返らなければなりません。悪魔に勝利を与えさせてはなりません。

ミカ書の中に、次のようなことばがあります。

ミカ書 7章8節

私の敵。私のことで喜ぶな。私は倒れても起き上がり、やみの中にすわっていても、主が私の光であるからだ。

悔い改めてイエス様のみもとに立ち返る者は、イエス様のもとにあつて、罪の赦し、救い、力、勝利を得ることができるのです。イエス様の悔い改めを求めることばは、警告のことばと結びついているのです。

ヨハネの黙示録 2章5節後半

「悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行つて、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」

もし、燭台が取りのけられてしまうならば、集会は「真の主のからだなる教会」であることはできません。集会はそれでもなおしばらくの間は存続するかもしれませんが、本当の主の集会としての働きはできません。もはや光を与えるものにはなり得ないのです。

主の前に容赦ない自己判断を下すことなしに、回復ということもあり得ません。自分を開け広げて自己批判をする者に対して、悔い改めと恵みが与えられます。もし悔い改めることをしなければ、私たちは主との交わりから捨てられてしまうのです。

創世記 3章24節

こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

と書かれています。

エデンの園から追放されるということと、燭台を取りのけられるということとは、同じことではないでしょうか。二つとも主との交わりから遠ざけられることを意味しているのです。しかし、私たちは何があっても悔い改めることができるので、本当に幸せではないでしょうか。

この間の土曜日でしたか、ちょうど松山での集会中、一組の夫婦が入ってきました。彼はアルコール中毒で大変でしたが、主に立ち返り、結婚しました。しかし、十何年ぶりに再び問題になりました。彼は集会場に入ったとき、あいさつとして「また飲んだ」と言っただけなのです。集会中でしたのでもちろん何も言えませんでした。しかし言いたかったのは、「それで終わりではないよ。主は真実です」と。

何があっても主のもとに立ち帰ることができるので、感謝なのではないでしょうか。

了